第７編　ヒマラヤ・ビスターリⅢ

（奇人・変人隊アンナプルナ・ベースキャンプを目指す）

‘04 年 11 月

写真１　アンナプルナ・ベースキャンプ

１．20 人の大部隊

成田に集合してツアーリーダーからメンバー表をもらうと参加者 20 名の中に三重県の元地さん夫妻の名前がある。4 年前にエヴェレスト街道の先端にあるゴーキョピークへ登ったときにご一緒させてもらった。あの時はツアー参加の長老から、ネパールの民謡といえる“レッサンピリリ”を毎食事の後に歌わされて、おかげですっかり私の持ち歌になってしまった。

20 代と思える若い女性のツアーリーダーが旅程の説明を始めると、“初日のバンコックのホテルはどの辺だい？”との質問が出る。若いツアーリーダーが答えかけると、“まず全体の説明をしなさい”との意見が飛び出る。参加者の意見に一つ一つ惑わされているところを見ていると、若いツアーリーダーにはこの爺さん婆さん連中は重荷かなと感じられた。いつものように参加者は 60 歳代以上と思える人たちばかりである。「金があって暇がある」のはこの年代ということになる。しかしこの注意を促したおっさん、何でこうも命令口調で偉そうに話をするんだろう。言ってることは正論なんだけど、もう少し穏やかに話せないもんかと思う。第一印象は嫌なやつだ。それにこいつの風体は何だ。成田空港での姿がトレーナーのパンツに登山靴といういでたちだ。荷物はサブザックにダウンジャケットを詰めた紙袋一つ。すべて機内持ち込み荷物で、預けるスーツケースやダッフルザックなどない。17 日間の旅行に対してこれだけという奇人である。新宿区早稲田近辺に住むという。以下メンバーの名前は出身地で表すので、彼の名は早稲田氏とする。

バンコックで名古屋・大阪・福岡の人たちと一緒になって全員集合となる。元地さんは特徴のある名前であるので名簿を見て気がついたが、私のほうはありすぎるほどの名前であるのであちらは気がつかなかったらしい。“元地さん”と呼びかけると“はっ”として、その後は旦那とオーバーな抱擁となる。どうせなら奥さんの方が良かったが、こちらは“まあお久しぶり”で済まされてしまった。20 人は多すぎるということで、ツアーリーダーは二人つき、シェルパとサーダー（シェルパのリーダーをサーダーと呼ぶ）やポーターに至るまで完全に二つに分けられるとの説明を受ける。東中心のＡ班と西中心のＢ班に分けられたので、元地さんとは“一緒になれなくて残念ですね”と話し合う。

２．観光地「ポカラ」への移動

３度目の訪れとなるカトマンズ空港は乗り継ぎだけで、すぐに観光地「ポカラ」へ移動する。30 人程度の定員の、いかにもヒマラヤらしい名前の“イエティ航空”の飛行機は美人のスチュワーデスが迎えてくれて、これからの旅への期待を膨らませてくれる。この飛行機は通路を挟んで、一列に一人と二人の合計三人坑の座席であり、有視界飛行である。これが帰りの時には災いして、30 分の飛行に対

写真 2　カトマンズ空港と美人スチュワーデス

して霧のために6時間待たされてしまったが、往きは極めてスムーズであった。

ポカラはカトマンズに次ぐネパール第2の都市ということであるが、スモッグと人に溢れかえったカトマンズに比べると、日本に例えれば東京と秋田ほどの差がある。ネパールの第一夜はポカラのホテルであり、ベッドで寝るのは次にポカラへ戻る2週間後までお預けであるが、明日からのテント生活を懐かしく思う気持ちのほうが強い。いつものことであるが海外登山に来ると、最初のうちは妙に日本での日常生活に関連した夢を見る。普通はめったに夢なんか見ないのであるが、面白いものである。この日はさらに奇妙なことがあった。技術屋の私は、自分の目の前にある疑問点を一つずつ解決することが、技術屋としてのスタイルであると思っている。専門知識を多く持ってもそれを現実のステージで活用できなければ意味のあるものではない。この夜、突然思いついた。長い間テーマにしていた問題で、やっと自分の思い通りの仕事ができたと思っていたのだが、結果はある条件下では満足できるが全体としては不満が残っていた。この不満に対して私は、一から十まで私の思い通りにやらなかった周りが悪いのだと結論付けていた。しかし頭の片隅では、もしかしたら自分に非があるかもしれないとも思っていた。その非が突然閃いたのである。原因がつかめれば、解決策の検討は簡単である。パソコンが目の前にないもどかしさに悩まされながら、この日以後高山病を心配しなければいけなくなるような地点に行くまで、一日の行動を終えるとテントの中で解決策を考えた。普段の自分がこんなに真面目であったら、もっと偉くなっていたであろうに。このときまとめた内容は、空調設備関連の雑誌に“放熱時の負荷配分”として掲載する予定である。その文章の一節には、～“山想えば人恋し、人想えば山恋し”と言われるが、日常の喧騒から離れて山へ行きたいと思い、山へ入ってみると逆に日常の喧騒を懐かしく思ったりするものである。～というものを入れる予定である。技術文書の中で公私混同もはなはだしいが、まあ読者には年寄りのボケ対策につき合わされたとあきらめてもらおう。

写真3　ポカラのホテルからの眺め

翌朝、リゾート地のホテルらしく客室のすべてが山に向かって窓があるように作られたホテルの庭からは、これから向かうアンナプルナ山群やマチャプチャレが遠くそびえていた。このホテルには皇族の紀子様も泊まられたということで、誰の部屋が同じ部屋だったかということがその日のもっぱらの話題であった。同室の江戸川氏と朝日に輝くアンナプルナ山群の写真を撮り合う。江戸川氏とは8年前にキリマンジャロを目指したときに同室になったのが縁の始まりで、その後中国四川省の大姑娘（タークーニャン）に続いて海外3度目のお付き合いである。海外登山の仲

間というものは日本へ帰ればそれっきりということが多い中で、キリマンジャロのときの仲間は結束が固く、今でも 72 歳の江戸川氏を筆頭に今年 34 歳になる若者まで 5～6 人で一緒に山登りをしたり飲み会を開いたりしている。よく人の悪口を言うときに“胎に逸物のある人” という表現があるが、江戸川氏はまったく逆で思ったことはすぐに口に出し、頭の中に一旦しまい込んで吟味してから口に出すなどということをしない。“江戸川さん、少しは考えてものを言いなよ”などと年長の人に対して失礼なことを言っても、まったく気にする風もない。こんな人柄が若者までもひきつけるのであろう。

３．トレッキング風景

トレッキングとは、生活道を歩くことを意味する。距離的には行程上の中ほどに当たるチョムロンまでは部落が点在して、まさにトレッキングである。ポカラからバスで登山開始地点まで移動してスタートする。早速みやげ物売りが付きまとってくる。“これから登るんだからまだだめだよ。下りてきたら買ってやるよ”と適当なことをいう。下り口はここではないのであるからいい加減なものである。過去 2 回のヒマラヤは 5 000m以上の山であったが、今回は最高到達点のアンナプルナ・ベースキャンプで 4 130mであるので、高山病に対する恐怖感も少ない。ヒマラヤ

写真 4　トレッキングの風景

トレッキングのいやらしさの一つは、4 000m近い高度が何日も続くことによる高山病であり、それにかかったらすぐに降ろす必要性からヘリコプターに頼らざるを得ないことである。しかし今回は 4 000m近くでの宿泊は３日間程度であるので高山病の心配よりも、日中は直射日光の下

で暑くＴシャツで歩くくらいであったのに対して、日没後は急激に温度降下して温度差の大きさの方が気になった。それでも高山病対策の一つである、水を良く飲んでおしっこをたくさんして、代謝機能を高めるということは忠実に守った。したがって夜中でも小便のために何回もシュラフを出ることになる。相変わらずヒマラヤの星空は、澄んだ空気の下のその瞬きの中に、自然が私に与えてくれた愛情の舞台をいっぱいに広げてくれている。

63 歳位と推定される港北氏が足を引きずりながら歩いている。山スキーで足を折って以来引きずるようになったというが、今回はさらにバスから降りるときに捻ったみたいで痛みもあるという。これから 2 週間の行動があるのに最初からこんな状態で大丈夫かなと周りを心配させるが、本人は至って饒舌でぺらぺらしゃべりながら歩く。例によってヒマラヤのビスターリ（ネパールの言葉で“ゆっくり”の意）歩きであるので、何とかなっているようである。それにしても博学である。枕草子や日本書紀・古事記などの古典から、オペラを始めとするクラシック音楽や、無声時代から戦後の最盛期を経て現在に至る映画の知識、さらに軍艦などの話がぽんぽんと飛び出してくる。軍艦の話では、あの戦艦は 80 000 トンとか数値も即座に出てくる。本人は“漫画雑誌「ビッグコミック」のコラム欄から得た知識ですよ。”などといっているがそんなものではないことは誰にでもわかる。古典で“巻の第 14”などといわれても私にはさっぱりわからない。意外にも奇人の早稲田氏が反応する。はげ頭をタオルにくるんでサングラスの早稲田氏は案外インテリなのかもしれないが、“仕事は何ですか？”と聞かれると、“ヤクの売人だよ”などととぼけている。仕事からはリタイアしたようで海外旅行ばかりしているという彼にはその風貌から、もしかしたらヤクの売人というのも本当かなと思わせるものがある。早稲田氏は音楽や映画に対しても港北氏に劣らないくらいの博識である。江戸川氏も、若いころは給料の大半をクラシックのレコードに使っていたということであり、にぎやかに仲間入りする。私も負けじと何とか話に加わった。しかし私の場合は 4 年程前にたまたまニューヨーク・メトロポリタン歌劇の日本公演チケットを 2 枚 8 万円で買ってしまって、そんなオペラ見物で居眠りするにはあまりにももったいないと、予備知識を得るために“リゴレット”のＤＶＤを入手したのがきっかけになって、オペラやクラシック音楽に入っていった俄か仕立てである。江戸川氏より数ヶ月だけ誕生日が早く、最年長である西宮氏は古典になると強く、話を合わせてくる。前職は教育委員ということで、日本山岳会所属である。神戸の裏山である六甲山を中心に年間 200 日近く山登りをするという。港北氏も 120 日以上山登りをするというし、足を折ったときには松葉杖をついて高尾山へ登ったという話を聞くとただあきれるばかりである。私の年間登山日数は 30 日近くであり、かなり多いほうであると思っていたが、彼らの前に出るとカタナシである。この人たちに負けてなるものかと知ったかぶりをして、“白玉の歯に染みとおる秋の夜の、酒は静かに飲むべかりけり”と言ったら、すぐに港北氏から“ちょっと違うね”と声がかかり、西宮氏から“秋の夜は、です。”と訂正が入った。

他に日本山岳会が 3 人いた。当初は日本山岳会だけでツアーを組むつもりであったらしいが成立しなかったのでこのツアーに参加したということである。

三浦半島に住むという人は三浦氏と命名したいところであるが、大学山岳部の監督をやっているということであるので“監督”と呼ぶことにしよう。少し出た腹と貫禄のある態度がその名前によく似合う。

デザイン関係の企業経営者である流山さんは大の映画ファンであり、映画談義では主役であった。また職業柄、元は画家志望であったような雰囲気もうかがえる。港北氏が多彩ぶりを発揮してスケッチブックを取り出して水彩画を始めると、後ろに立ってプロの目で見たアドバイスを送っていた。

トレッキングツアーでは男よりも女の方が人数の多い場合がほとんどであるが、今回のメンバーでは女性は一人であるのでこの人は紅一点氏と呼ぼう。３人とも年齢は 63 歳近辺である。

テントでの最初の夕食のときに、彼らは三浦雄一郎さんのことをぼろくそに言う。“あんなやつは、エヴェレストに引っ張りあげてもらったんだ”などということを言う。私は、４年前ゴーキョピーク・トレッキング時のシェルパのサーダーが三浦雄一郎氏とは縁の深いピンジョーであったことで、たまたまその時ゴーキョピークへ来ていた三浦雄一郎氏に出会った折にお話をさせていただき、有名人なのに謙虚で気さくな人であるという印象を持っていた。（“ヒマラヤ・ビスターリＩ”参照）　“そこまで言うことはないでしょう”と口をはさむと、“あんたは知らないからそんなことを言うのだ”と高飛車に言われた。このことに関する彼らの話には不快感を持った。もともと私は上役の悪口を言いながら酒を飲んだりすることを快く思っていない。それと同じような感じがした。

写真 5　ヒマラヤの桜

ヒマラヤには数多くの種類の桜があるという。日本では季節外れと思われる 11 月頃に咲く桜がずいぶん見受けられる。昨年 11 月にランタン谷でも見かけたが、アンナプルナへ向かう谷筋にはそれ以上に多くの桜が目立つ。

この時期にはネパール全土でティハールという祭りが行われているということで皆で飛び入りの見物をする。数日間続くそうで、期間中は日によって、「今日は牛にお祈りをする祭りの日」とか「今日はカラスの日」とか毎日やることが違うらしい。最初のうちは彼らの踊りを見ているだけであったが、最後には全員引っ張り出されて踊りだす。シェルパダンスもそうであるが特に決まったステップというものはなさそうで、昔懐かしのツイストの真似ごとでも違和感はない。夜風が寒かったのでちょうどいい暖房効果になった。

写真 6　村の祭り

チョムロンを過ぎると部落はなくなり、渓谷沿いの山林におおわれた山道の登り降りが続く。アンナプルナのトレッキングは高度も

低く毎日の行程も短いので楽だと思っていたが、登り下りが多いので案外きつい。私を含めて今回のメンバーはほとんどヒマラヤ・リピータであるので軽く考えていた人が多かったみたいであるが、口々にそのような感想を洩らしている。同感である。

紅一点氏が、自分は歩くのが遅いから皆さんより早くスタートしますといって、監督氏とシェルパ一人を伴って我々が朝食を始める前に出て行った。ヒマラヤでは元々がビスターリ歩きであるので腹が立つほど遅いわけでもなかったが、時々景色に見入って立ち止まったりされると歩くのが遅いんだからそんなことするなよと思ってイライラさせられたこともあった。皆は同様に、そんな気使いすることないのにと言って見送った。私もそれ程でもないのに思ったがそれは本人以外の人間の勝手な配慮であって、彼女にしてみれば感動した場所でゆっくり景色を眺めたくても皆への気使いのために歩きつづけるよりも、自分の歩きたいように歩いた方がよいのであって、彼女の選択は正解であったのかもしれない。

写真 7　マチャプチャレとタルチョ

ポカラから見たマチャプチャレはただ尖がっただけの山であったが、アンナプルナ山群の中に入ると近くの山の上にその特徴ある山容を覗かせ始める。マチャプチャレとはネパール語で魚の尾ヒレを意味するということで、この角度からのマチャプチャレはまさにその通りである。エヴェレスト街道やランタン谷ほどには多くは見かけなかったタルチョも散見されるようになった。しかし、お経が書き込まれた鐘状のもので１回転させるとお経を１回読んだと同じ効果があるというマニ車や、ラマ経のお経を書きつけたマニ石といわれる岩などはこの地域では見かけない。住んでいる人達の種族の構成が違うのであろうか。

中越大地震の直後だというのに、新潟県から大回りして東北新幹線を乗り継いで参加した中蒲原さんは、奇人・変人ぞろいの今回のメンバー中では西宮さとともに数少ない常識人であるが、大地震直後ということもものともせずにヒマラヤくんだりまで来るだけでも、世間常識の見地か

らはやはりいっぱしの変人に属するかもしれない。元は校長先生で現在も教育委員長ということであるので、変人の仲間に入れてしまってはバチが当たるかな。

さて、今回の奇人・変人メンバー中の真打登場である。戸塚さんは、現在はタクシーの運転手をしているということであるが、かつて勤務していた会社で転勤拒否をして、組合活動に専従した経験もあるという筋金入りである。新聞を取っていない。テレビも持っていない。電話もない。兄弟・別れた妻子とすら数年に渡って連絡をとったこともない。世の中皆がこういう人だったら、吉幾三の歌は売れなくなる。人が尋ねてきても決して扉を開けないという。それでは人間嫌いなのかというと、そうでもなさそうである。テントは二人一組でありペラリストの港北さんと組んでいたが、テントの中ではもっぱら港北さんが聞き役に回ることが多かったようすで、就寝前のテントからは戸塚さんの声がよく響いていた。夕食後の談笑時に戸塚さんが前述の経歴を披露したときに、ただびっくりしたり感心したりしているだけの一同の中で、真剣になって真っ直ぐな内容の質問の雨を降らせたのは、元教育委員会の西宮氏である。豊富な教育委員会経験の中でも戸塚氏の一徹さは稀な例なのであろう。これに対応する戸塚氏の答え方も真っ直ぐなものであり、聞いていて気持ちがよかった。

写真８　食堂テントの中での夕食風景

４．ツアーリーダーとサーダーとシェルパ・ポーター達

最初は頼りなげに思えたツアーリーダーであったが、トレッキングが始まってみると様相は一変した。ネパール語がぺらぺらなのである。サーダーやシェルパたちと楽しげにネパール語で話しながら歩いている。トレッキングのサーダーという職業を全うするためには英語がしゃべれるということも大きな要素であるので、彼らと日本人のツアーガイドとがコミュニケーションを図る上で困ることはないのであろうが、やはり母国語で話してもらえることは彼らにとってうれしいに違いない。聞いてみると、大学卒業後約 2 年に渡ってネパールへ留学して、その後に山専門の旅行会社に勤めて現在 25 歳ということである。あんまり親しげにするので、彼女は我々の面倒見をするよりもサーダーと話している方が楽しいのかと、やきもちを焼く人も出てくる。それを指摘されると彼女はムキになって、食事を何にするとかサーダーと一緒にメンバーの調子への気遣いばかりしています、と反論する。確かに彼女の前を歩いているときに聞こえてくる単語にはパスタとかベジタブルとか、私にわかる言葉では食事の内容を思わせるものが多かった。サーダーはとてもよく皆を観察していて、口数の多かった人が急にしゃべらなくなった、などという内容のことを話し合っているのだと言っていた。私に思い当たることがあった。歩いている最中に便意を催して、その我慢のためにしゃべらなくなった時間帯があった。トレッキングに帯同す

写真 9　サーダーのテンパと

るシェルパのサーダーというものは、山を確実に案内するということは当たりまえとしていて、トレッカーという客がいかに楽しく安全にすごしてもらうかに腐心しているプロフェッショナルであるといつも感じる。サーダーの名はテンパという。昨年のランタンのときのサーダーもテンパという名であったが､別人である。このあたりはテンパという名が多いらしい。

サーダーの下にはシェルパが 5～6 人ガイドとしてわれわれをサポートしてくれる。この中には将来はサーダーになることを夢見ている若者もいる。19 歳のディパックもその一人で、お父さんはこのパーティーに帯同しているキッチンポータの一人だというので、自慢の息子ということになるのであろう。シェルパ学校のライセンスというのを誇らしげに見せてくれた。ドイツ人と 3 ヶ月間に渡ってジョムスン街道をトレッキングしたときの話をしてくれた。今回は途中から紅一点氏と監督氏をサポートする別働隊のガイドを務めていた。この他に料理だけを担当するキッチンポータと荷物もちだけを行うポーターがいる。彼らの役割ははっきり分かれていて、シェルパはガイドであるので客の荷物などは持たない。それはポーターの役割である。テントの設営や朝の撤去はシェルパの役割で、朝の出発前の忙しい時間帯にシェルパが奮闘していても、ポーターはのんびりタバコをふかしている。

５．ＭＢＣ→ＡＢＣの映画談義

マチャプチャレ・ベースキャンプ（MBC）まで来ると高度も 3 700m まで上がって、日陰には数日前に降ったと思える雪も融けずに残っている。ヒマラヤの高山に来たぞという雰囲気になる。高山病対策としては、高度 4 000m近くになると 1 日の高度差を 500m 以内にしておいたほうが良いとされる。そんなことで MBC からアンナプルナ・ベースキャンプ（ABC）へ移動する日の行程は約 2 時間と楽チンだ。高原状ののんびりした景色を満喫しながら歩く。相変わらず映画の話・クラシック音楽の話とわいわいがやがやと実ににぎやかだ。ツアーリーダーが、“こんなに楽しそうに歩くメンバーも珍しい、とサーダーが言ってるわよ。”と話してくれた。江戸川さんがいつものように、“えーと、あの映画なんてー題だったかな。ほら、あの監督でさ。あの監督だよ、あれ。主演がさ、あれで。えーと、名前が出てこないな。ほら、背の高い、あれだよ。ここまで出てきてんだがな。ほら、ほら”しゃべるほど？？が増えてくる。しかし今回の江戸川さんの頭は冴えていた。15 分位たつと突然思い出すのである。私も似たようなことをやっていた。“えーと、あの絵の世界がさ、そのまま映画になったような。あの題が出てこないな。カタカナ 2 文字でさ。監督が、何だったかな。あの多彩なやつ。奥さんが女優で、狂信的な宗教家に惨殺された。”

とここまで言うと、港北氏が“シャロン･テートかい。それじゃ監督はロマン･ポランスキーだよ。”と教えてくれる。“そうそう、あ、題名はテスだ。ナスターシャ・キンスキーがきれいでさ。”まあ、にぎやかなものである。周りの見事な景色なんか明日も見られるからいいや。といった按配である。

この日、午後になると雲が出てきて日差しが遮られたらとたんに寒くなった。予定していた

写真 10　アンナプルナ・ベースキャンプ集合写真

ABC 散策は中止になり、食堂テントの中での歌の時間となる。得意のレッサンピリリを 2 番まで歌う。サーダーから“完璧”の評価をもらう。しかし今回の行程中に聞いたこの地域のレッサンピリリは、私がエヴェレスト街道で覚えた歌い方とサビ以外の部分でメロディーが少し違う。またエヴェレスト街道のときは､われわれに同行したシェルパたちは 2 番までしか歌わなかったが、ここでは際限なく何番までも歌っている。最近の日本では、相変わらず中高年中心の登山ブームは続いているが、山小屋へ泊まっても山の歌はなかなか聞くことができない。私は大学時代にワンダーフォーゲル部でキャンプファイアーのファイアーマスターをやっていたので、主な山の歌はだいたい暗誦している。歌の時間になるとがぜん張り切る。紅一点氏は女性にしては高山植物への関心が薄いようであったが、歌になると私についで詳しかった。同好者がいてくれないと、自分ひとりが浮き上がってしまうようで乗れないものであるが、彼女のおかげで楽しい時間を持てた。

中蒲原氏と港北氏は雲が切れたわずかな時間にスケッチブックを取り出して水彩画に熱中する。戸塚氏はこだわり派の一面を持つ。こだわったことに対してはどこまでも一徹である。マイ・ハシを持参して、あてがわれた食器は使わない。飛行機の機内食をとるときでさえマイ・ハシである。お茶にもこだわる。当然日本から持参のマイ・オチャであり、きゅうすも自前である。皆に

もふるまってくれる。写真にもこだわる。山登りをする人は写真狂が多いが、彼の場合は狂の字が付くほどではなさそうであるが、斜めに構えてピントを合わせた後でシャッターを切るやり方にも、独自の哲学があるのかと思わせる。

写真 11　アンナプルナ I のモルゲンロートとマチャプチャレの影

翌朝は日の出前から皆テントを出て山を満喫する。アンナプルナ I (8 091m)・アンナプルナサウス(7 220m)がモルゲンロート（ドイツ語で朝焼けの意）に輝いている。マチャプチャレ(6 998m)の影がアンナプルナサウスに映っている。ここから見るマチャプチャレはただの絶壁であり、魚の尾の形は見えない。45 人の登山家がこの山を目指して、目的を達成することなく死んだということで、今は登山禁止になってしまったので、未踏峰であるという。私のように高現状ののんびりしたところをゆっくり歩くことが好きな人間にとっては、あんな絶壁に臨むことだけでも信じられないことである。同じ山登りといってもだいぶ違いがある。

６．テコンドー娘と国際温泉ギャル

この山域ではいつものように数多くの国の人達と出会う。いつものように“Where are you come from？（どこの国からきたのですか)”を連発する。過去 2 回はドイツ人が多かったが、今回はフランス人がやたら多い。アンナプルナという山の初登頂者がフランス人であったためであろうか。

6 日間かけて登った山を、また 6 日間かけて下る。MBC を過ぎた辺りで東洋系のきれいな女性と行き違う。“日本人かなー、韓国人かなー。”と問いかけると、日本語で“韓国人です。”と答えてくれた。その笑顔としぐさがすごく可愛らしく印象に残った。その晩のテントサイトは狭いところであったので食堂テントを張る場所の確保ができず、バッティと呼ばれる山小屋の食堂でバッティの客と一緒にとることになった。そこには例の韓国美人もいた。われわれ爺様連中は自分の年のことはさっぱり忘れてしまって、一生懸命流し目を送る。彼女のほうはケンもほろろでま

ったく無視して、隣にいるたまたま出会ったという別の韓国人男性 3 人組みとばかり話をしている。ここで活躍したのが我らの奇人・早稲田氏である。得意の度胸英語を駆使して、まず韓国人男性の一人にアプローチし、折を見て彼女のほうに切り込みをかけて何とか篭絡しようと懸命の努力を図る。アリランの合唱までやりだした。涙ぐましい努力である。歌が出れば私の出番である。レッサンピリリを歌う。これには彼女が反応した。私の歌っている姿をカメラに収め始めた。

写真 12　テコンドー娘と

悪い気はしない。早稲田氏の仕入れてきた情報によると、彼女は、年齢 29 歳、エアロビクスのインストラクタを職業としてテコンドーの選手であったこともあるという。そこでわれわれの仲間内での彼女の愛称はテコンドー娘ということになった。4 ヶ月かけて東南アジア・オーストラリアを回っているという。翌朝スタート前の体ほぐしをしていると、テコンドー娘も柔軟体操を行っていた。長い足を自分の目の高さ以上まで上げて体を曲げている。驚くほどのやわらかさである。調子に乗って“一緒に写真に写ってくれますか？”と問うと、快く応じてくれた。ますますファンになってしまった。日本語は少しだけであるが英語は発音も本格的である。

翌日は温泉のある村ジヌーダンダ泊である。すでに 8 日間風呂に入っていないので、川原の脇に四角くコンクリートで仕切られた温泉へ行く。ヨーロッパでは温泉へ入るのは水着を着けて入るのが当たり前というので、水着を忘れた人はパンツのまま入った。外人女性も入っている。水着を用意している人もいれば持っていない人もいる。持っていないならば裸で入ればいいのに、Tシャツとトレーナーパンツのまま入ったりしている。この温泉はぬるいので 1 時間近くも入っていたので、オーストラリア・ドイツ・イギリス・イギリス在住のインド人など 5・6 人の外人女性にもたっぷりアプローチできた。ヒマラヤへ来る直前までオーストラリアへ行っていた早稲田氏にはもって来いであって、さっそくオーストラリア女性にアタックをかける。それを起点にして、各国の民謡を歌いましょうなどと、ロンドンデリア・ワルチングマティルダなど次々に歌う。いつも外人には積極的な江戸川さんは今回やけにおとなしい。往きの飛行機の中では隣り合わせたイスラム系の若いお兄ちゃんには結構話しかけていたが。ペラリスト港北氏も外

写真 13　国際温泉ギャルと仲間たち

人女性の前ではすっかりおとなしくなる。彼だって海外登山のベテランであるから外人慣れしていないわけではない。奇人・早稲田氏という一人の突出した人がいると半端なスペシャリストは並の人になってしまう。コミュニティ内における平衡維持とでも言おうか。早稲田氏は、色浅黒いが端正な顔立ちのインド人女性がお気に入りのようだ。テコンドー娘は生意気だったけど、インド娘はシャイなところがいいなどと言う。このヤクの売人ふうが、シャイがいいなんて笑っちゃうよ。

東洋系の人は何人であるか見分けがつけにくいが、ヒマラヤなどの高山では若ければ韓国人、ジジ・ババであれば日本人と思えばだいたい当たる。キリマンジャロでもそうだった。たまに出会う韓国人の中年以上の人は“アナンセヨ”なんて気安く声をかけると、きつい目で睨まれたりする。その障壁には高いものがあることを感じさせる。しかし若い人たちはまったく違う。言葉を交わしてもフランクである。彼らは一様に英語をスムーズに話せるので、むしろ気後れすら感じてしまう。だいたい外国まで山登りに来るような人で、英語をろくにこなせないのは日本人くらいのものである。近年の韓国の経済的発展がこのような自信を持たせているのであろうか。われわれの世代では、韓国というのは日本のまねをして発展してきたという認識があった。ヒマラヤなどの高山に来る韓国の若者を見ていると、日本というフィルタを通して世界に目を向けているのではなく、彼ら自身の目で世界を見ているように見える。帰りにバンコックの飛行場で出会った数多くの日本人の若者を見ると、あんまり長生きなんかしないほうがいいかと思った。

７．食事のこと

ヒマラヤではカトマンズに、シェルパ向けの日本人の経営する料理学校があるということで、元来味音痴の私にはちっとも困ることはない。しかしヒマラヤ３度目ともなると、朝はおかゆの後にたまご料理にパンなどという定番にはあきが来る。そんなところを救ってくれたのが女性ツアーリーダーのきめ細かさである。食事のメニューにはツアーリーダーの意向も多少は反映されるようであり、ABC では白玉の入ったゆでアズキ、ヒマラヤ料理に飽きたころにはいなり寿司がメニューにならび、われわれを喜ばせてくれた。夕食で一度、ネパール料理のダルバートが出されたことがある。お皿にご飯を載せて、カレーライスのようにその横に肉だの野菜などが積まれているものを、手でかき混ぜながら食う料理である。ネパール人はほぼ３度３度これが食事であるという。ただ彼らの食事風景を見ると、喰う量がまるで違う。われわれの ３・４ 人前は軽く喰う。運動量が違うともいえるが。昨年ランタン谷を下りてから、現地の店で食べさせてもらったダルバートとは大分味が違う。おそらく日本人用にスパイスなどは抑えてくれたのであろう。

高山病対策のもう一つに飲酒を控えるというのがある。私はポカラでの夕食時のビールを最後として、トレッキング最終日のオーストリア・キャンプに着くまでは禁酒を誓っていた。しかし標高が３ 000m 以下になったころに、まず港北氏がラム酒を仕入れてきた。もともと飲むことに関しては意地汚い私のムシがうずき始めた。いっぱいどうですか？という誘い水に乗ったのが運の尽き。最初の日こそ一杯で止めておいたが、3 日後には酒がなくなると今度は自分でバッティへ買いにいくようになってしまった。監督氏は、俺は８ 600m まで登ったんだからこんな所は丘みたいなもんよ、とトレッキングが始まっても毎日飲んでいた。MBC では、ツアーリーダーから“標高も高くなってきたからお酒は控えましょうネ”、と言われて“ハイ”と答えていたが、守

ったかどうかは怪しいものだ。その監督氏が意外にも、皆が飲み始めると“俺は、酒は飲まないんだよ”と言って、あまり飲まない。でも彼のことだから、酒は一人でじゅっくり飲むものよ、とテントの中で飲んでいたんじゃないかな。

８．村の情景

この日は5日間に渡ったテェハール祭りの最後の日であり、道端で子供たちがとうせんぼをしてレッサンピリリなどの歌を踊りながら歌っている。通りすぎる人はいくばくかのお金を置いてゆく。大人が取り仕切って子供たちがねだりすぎたりしないように監督しているようなグループもあれば、一見して貧しい姿でいつまでも手を出してくる子供たちもいる。しょっちゅう出くわすと“いい加減にしろよ。”という感じになってくる。港北氏はニコニコといつもだれにもお金をあげていた。

写真 14　ティハールでのとうせんぼの踊り

トレッキング中の休憩をとっているときに写真 15 に見るような 3 人の女の子が談笑している情景を見た。まるで絵の世界である。自分がコローやクールベでなかったことがしゃくになるような光景である。蛇足とは思うが、

写真 15　談笑する娘たち

この写真は彼女らにポーズを取らせたものではない。まったくの自然の情景である。その彼女たちがどこかにいなくなったと思っていたら、歩き出したわれわれの眼に入ったのが写真 16 に見るひえ畑での農作業にいそしむ彼女たちの光景であった。俺たちは詩の世界を散歩しているのである。

写真 16　ひえ畑での農作業風景

９．奇人のケガと人柄

下りにかかるとどうしても気が緩んでしまう。朝スタートしてしばらくのところで、早稲田氏が石造りの洗濯場にもなるのであろう水場で、濡れた苔に足を滑らして転んで両足から血が吹き出すケガをしてしまった。滑ったときにこらえようとして踏ん張ったのが返って足の捻りを大きくしてしまった。気の緩みと断ずるのは気の毒であるが、歩きながら手を洗おうとして転んだ早稲田氏には、やはり過信があったのであろう。われわれ年寄りには、この程度のことは今までやっていた、だから今回もできる、と思うことは禁物である。それでは用心深くすれば危険から逃れられるのか、物事はそんなに単純ではない。日常生活の大半のことは今までの延長線上でできているのである。痛い目にあって始めてその次から同じことをしないように気をつける。これができるだけでも大変理知的な人であるといえる。危ないことに遭わないように、そういうところには行かないというのは論外である。人だから危険は常に周りにあり、生きているからケガをするのである。

ところで治療の間は、痛いのは彼であって俺ではないので、目の前に広がる段々畑ばかり見ていた。その規模の大きさは、日本で見るそれの比ではない。人はなぜこれほどまでして働くのであろうか？飯を食うためであって、生き続けるためである。人が生きるのは高尚な哲学の論理に

基づいて生きるわけではない。じゃあ何だっていうんだ。結局、わかるわけがない。暇なだけなんだよ、俺は。

当初は嫌なやつと思った早稲田氏も、映画や音楽や女性へのアプローチなどを通じてその人柄もだいぶわかってきた。そしてこのケガが早稲田氏を一層普通の人間へ戻していった。ケガの治療で皆を待たせたことに対して“ご迷惑おかけしました”と頭を下げたのである。“俺は悪くないのにこの石がいけないんだ。”くらいのことを言うやつだと思っていたが、それほど非常識なやつではない。俺だったら言いかねないが。強気な表現になるか、弁解がましくなるかは痛さしだいだ。彼の年齢は59歳。なんだ、この中では一番若いじゃないか。これを知ってから私は夕食後の一杯入った席で、“おい、早稲田。”と呼び捨てにしてしまった。直後に“親しみの意味だよ”と添えたのはだらしない。職業は元予備校の教師で、いまは辞めたので時間はいくらでもある、ということである。彼の音楽に対するレベルは今回のメンバーの中でも 1 枚上手である。モーツアルトの＃40が好きだとか、ベートーベンの田園を知っているというレベルではない。誰の何は誰が演奏したときのここが良かった、とかいう話になる。自分の耳で聞いたものに対して良し悪しの判断もできるようであり、演奏会の最後に慣例のようなアンコールの拍手を送るような人ではない。特にロシアの作曲家に詳しいようで、私のようにチャイコフスキー・ラフマニノフ止まりではない。ハチャトリアン位まではいいがその後の現代作曲家までいくと、とてもついていけない。

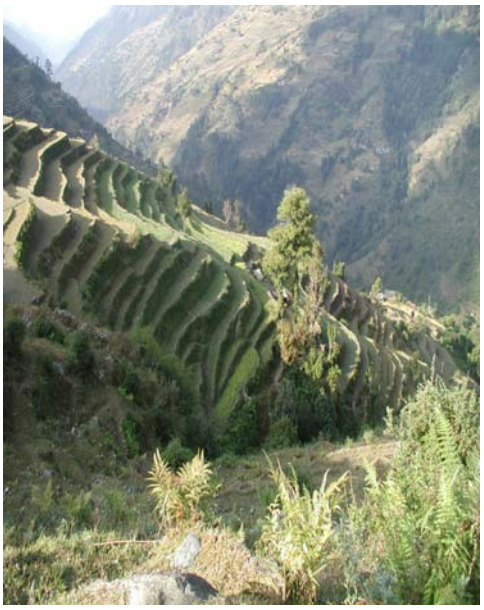

写真 17　段々畑

１０．　港北氏は中庸

普通は話し上手とか聞き上手というものはどちらかになるものであるが、港北氏は珍しくその両方である。戦後の小説家・坂口安吾描くところの黒田如水を思い出す。坂口安吾は「二流の人」という小説で黒田如水を描いている。しばしば“中庸”という言葉と黒田如水を結び付けているが、（「中庸」という題の小説もあるが、これは如水そのものを描いているわけではない。）織田信長や徳川家康と比較して二流だの中庸だの言っているわけで、半端人の意味ではない。かなりの策士であり軍師でもある。港北氏の経歴は、大学では商学部を卒業して製薬会社の営業を数年勤めた後に、一念発起して一級建築士の資格を得て建築設計者を経て、その後も数種の職についたということであり、凡人であったら真似できない。豊富なクラシック音楽・古典文学・映画・軍艦をはじめとする近代戦紀への知識。また別の面では、若い頃から海外登山をやっているようで 20 年以上前にキリマンジャロへ行っているというし、家族総勢で屋久島や利尻岳のキャンプを行ったこともあるという。他人事ながらよくそんなにお金が続きますね、と言いたくなる。人相風貌からはいいところのお坊ちゃんとは思いにくい。下山後のホテルでは度々奥さんに国際電話をかけていたようでもあるので、愛妻家であるか恐妻家みたいである。そうだ、彼は逆玉の輿に違いない。そういうことにしておこう。彼の口数の多さの中からは、自分をひけらかそうとい

う影は見られない。周りの人に対するサービス精神から話をしているのでもない。早足で歩けば汗が出るのと同じごとくに、自然に口元から言葉がほとばしり出てくる。その言葉の中に知識が乗っかっているだけであるので、聞いていていやみがない。

１１．フィナーレ

長かったトレッキングもいよいよフィナーレとなるオーストリア・キャンプに着いた。なぜオーストリアという名がついたのかはわからなかった。広々とした高原状のところで、晴れていればアンナプルナサウスやマチャプチャレが一望の下に見渡せて素晴らしいところであるということであるが、この数日だんだん雲が多くなってきて山の姿はまったく見えない。なんとトレッキング初日にいたしつこいみやげ物屋が待ち構えている。登り口と下りてきたところは別の場所であるのだが、そんなことでへこたれていたらこの商売はできないのであろう。“トモダチ、トモダチ”と愛嬌を振りまく。しかしここまでされると、やはり不快である。ほとんどの人が無視する中で、中庸の港北氏が買っている。彼にすれば自然の行為なのだろう。

夜になると恒例のシェルパやポーターとのお別れ会になる。シェルパダンスというやつは、のべつまくなしに踊りまくる。ちょっと椅子に座ると誰かが手を引っ張りに来る。おかげでチャンやロキシーという酒の量は少なくて済む。シェルパやポーターは一仕事終わった後だからといって酒で乱れるような人はいない。踊りも一応楽しんではいるが、日本の祭りで見るような興奮した様子の人は見られない。やはり彼らにとっては、まだ仕事中の一環であり、おそらく彼らだけの慰安会の時にはまた別の顔があるのであろう。

ネバーランドとはしばしのお別れである。

写真 18　全員集合

海外登山履歴

‘89 年 05 月	キナバル山	マレーシア
‘96 年 01 月	ミルフォード・トラックとマウントクック	ニュージーランド
‘97 年 11 月	キリマンジャロ	タンザニア
‘98 年 08 月	ヨーロッパアルプス	スイス
‘99 年 07 月	太姑娘	中国
‘00 年 11 月	ヒマラヤ　ゴーキョピーク	ネパール
‘02 年 05 月	ウィルヘルム山	パプアニューギニア
‘02 年 12 月	ケニア山	ケニア
‘03 年 01 月	キリマンジャロ	タンザニア
‘03 年 11 月	ヒマラヤ　ヤラピーク	ネパール
‘04 年 05 月	トルーカ山	メキシコ
‘04 年 11 月	ヒマラヤ　アンナプルナ内院	ネパール

思い出のミルフォード・トラックとマウントクック

最初に海外へ行ったのは‘89 年のキナバル山であったが、それからしばらく間をおいて‘96 年にニュージーランドのミルフォード・トラックとマウントクックのトレッキングへ行き、以来‘01 年を除いて毎年海外の山へ行っている。この間一度だけ業界のお遊び研修旅行でアメリカへ行かせてもらったことがあるが、背広を着て海外へ行ったのはこのときだけである。ほとんどが未開発国であるが、ニュージーランドは私が行った国の中では数少ない先進国の一つである。日本は安全な国といわれているが、安全な国とはこういう国のことをいうのだと思わせられる。観光政策はユニークであり洗練されている。ミルフォード･トラックのトレッキングコースは、日本でいえば上高地から横尾を通って槍沢へ行く道のようなところを、5 日間かけて歩く。1 日当たり 45 人以下の人しかこのコースに入ることは出来ない。しかも一方通行である。45 人のメンバーは国際隊を組んでコースの中に設けられた山小屋へ一緒に泊まる。ただし歩くときはそれぞれ仲間同士でおのおの歩いてよい。そこまでは規制されない。われわれが行ったときは、日本人の 15 人程度とニュージーランド人の 10 人程度が大所で、あとはイギリス・アメリカ・オーストラリア・シンガポールなどであった。私の英語はひどいものであるが、初めて外人との共同生活であるので積極的に話しかけた。最初のうちこそ相手をしてくれたが、日を重ねるにつれて相手にされなくなった。アメリカ人のダイアンという 40 代くらいと思える女性だけは向こうからも話しかけてくれた。ただし最終目的地のミルフォードサンドに着いたら、ちゃんとダンナが迎えてくれていた。このようなトレッキングのやり方は人口の少ない国であるから出来ることで、日本での適用はまず考えられない。このときわれわれのツアーは 12 人であり、ミルフォード・トラックが終わると 4 人が帰ってしまって、マウントクックへ行った中で男は私 1 人が残った。ツアーリーダーも女だった。女ばかりといっても歳の方は私とポチポチばかりであるので、今ハーレムというわけにはいかなかった。最初こそイヤダナーと思ったが、夕食後の談笑時には誰かがウィスキーを運んでくれる。飲み終わるとまた別の誰かが買ってきてくれる。このとき一緒に行った船橋の三小母さんは、ヒマラヤ・ビスターリなどの私の書くものの良き読者であり、いつも送ってあげると絶賛してくれるから気を良くする。今回のヒマラヤ･ビスターリⅢは書くつもりはなかったのであるが、その中の一人の小松さんからの“紀行文を楽しみにしています”というメールをもらって書く気になった。